愚考考古学(13)

難読・難解・地名の当て字

中林幸夫

（会員・佐伯市長島町）

大分県には、大分の分にはじまり、海部郡の海と難読・難解な地名が多い。

佐伯のちかくでも上浦町の浅海井・最勝海。米水津村の間・和留佐、蒲江町の天ノ上御上場・百サン土取場、弥生町の盗人河内・出羽、直川村の御持・ヘホキ・シテ、宇目町の除・悪所内、本匠村の波寄・小半・苣ノ木・呑ノ越、そして、佐伯の波越と、数え切れないほどの難読、難解な地名がある。

県内の広報紙でも「わがまちの珍・難読地名」を取り上げているが、中でも上浦町の「最勝海」は、どの字が「ニ・イ・ナ・メ」か分からない。

最勝海浦の起こりは、『豊後風土記』にあるとされているが、大正三年に発行された『佐伯志』の中にも、佐藤蔵太郎氏が

蒲戸・福泊・長田・夏井の四浦を合併して、下すに最勝海浦の名を以てす。最勝海浦とは如何なる意歟、或は謂はん、是れ豊後風土記の本文に拠れるなりと、同書穂門郷の条下に、天皇御船泊於此門海底多生海藻而長美天皇即勅曰取最勝海藻便令以進御因曰最勝海藻門今謂穂門者訛也とあり、和名抄に海藻、和名保都米、又た邇木米と云ふとあり、風土記の文に拠れば美なる海藻を採りて天皇に奉りたる処は、今の保戸島より蒲戸崎に至るの間ならざる可からず、然るに蒲戸崎を曲りて遠く西北に入込みたる地方の蒲戸・福泊・長田・夏井等に、最勝海の名称を附したるは、甚だ地理を違へるものなり、且つホヅメとホトとは、音読の多少似通へる所もあれど、ニナメと称するに至りては更に縁なし、況んや穂門を距る数里外の地にニナメ浦なる名称を附するをや、是れ予が後世に至りて、其地理上に惑ひを生ぜしむるの恐れありと為す所以なりと書いて、将来に疑問を残すと述べている。

最勝海浦の現在の範囲は、明治八年の文書では、大分県設置により海部郡は第四大区となり、最勝海浦（蒲戸・福泊・長田・夏井）は第一八小区となっている。

確かに佐藤先生が述べているように、風土記のいわれであれば、保戸島と蒲戸崎間でなければならず、蒲戸崎と夏井間では場所的にも違うように思われる。それでは「何故」という疑問がわく。

そこで、あれこれ愚考を重ねていると、佐伯史談会の永遠のテーマであるリーフデ号の漂着地シャチバイが浮かんでくる。

シャチバイは、一六〇〇年ごろに豊後の国に存在した地名であることは、三浦按針の史実の存在と記録からして信じて疑いのないところであり、それが何処かが不明なだけである。

「最勝海」を「ニイナメ」と呼ばずに、漢字であることから中国語として分析して考えてみると、最（ＺＵＩ）勝（ＳＨＥＮＧ）海（ＨＡＩ）となり、「ニイナメ」と読むより「ジ・シェン・ハイ」となる。按針の記録の「シャチバイ（ＸＡＴＩＶＡＩ）」の方に読みかえることも可能である。これを「シャチバイ」の当て字として考えられないだろうか。

現在、リーフデ号の漂着地を上浦の最勝海浦に当てても佐伯湾であれば、あまり異論はないように思われる。

大友宗麟がキリシタン大名であったことから、古くから南蛮貿易が行われていたため、リーフデ号より先に中国の唐船等が佐伯湾に寄港していたことは考えられ、中国人が呼称した地名もあったと思われる。

一六〇〇年ごろといえば、織田・豊臣・徳川と変わっていった戦国時代で、豊後の国も大友から太田・稲葉・毛利等と混乱と変遷の時代であれば、地名も支配者の移り変りによって度々変えられ、また、蒲戸崎のように僻地小藩の狭間にある所は、支配の及ぶ側で地名を付け、呼称していたかもしれない。地名に一貫したものがなかったために、明治に至って行政的に明文化するとき、呼称に当て字を使ったため、難読難解なものが多く残されていたと、思われる。

三百年も続いた江戸幕府でさえ、支配者の交代で東京となり、百年で忘れ去られそうになっている。外国では国名さえ変えられている。

佐伯の町名も住民の意見をあまり聞かず変えられつつあるが、歴史を持つものは永久に保存して、変更せずに使用し、残したいものである。